

## 月の花挽歌 ～2. 酒とバラの日々～

### 2-2

銀座八丁目、並木通りの突き当たりにある『お多幸』は、知る人ぞ知る、おでん通には堪えられない店で、カウンター席、テーブル席、掘りごたつ式の座敷がある。

2007年9月11日。午後6時を回った頃、堀内と真紀の二人は、『お多幸』の座敷で爛酒を酌み交わしていた。

「冷房を効かせての爛酒とは、おかしな様だね」と言って、堀内は真紀の酌を受けながら同意を求めた。

「いまだに真夏日ですからね。でも、信州はもう秋でしょう？」と真紀がおざなりを言うのを嫌って、「冷酒に切り替えよう」と堀内は、わざとがましく言って、この店特有の真っ黒い出し汁から大根をつまんだ。

「冷酒をお願いします」

男の言い草の嫌味まで吸い取って、真紀はインターホンで注文した。

「今日のアなたは、妙に色っぽいね！」

堀内は、好い仲になって、まだ半年足らずの女の物分かりの速さに前のめりになっているのを見抜かれるのを隠そうとして、有り触れた物言いの上塗りをしてしまった。

「あら、今日に限ってでしょうか？」

真紀も、しっぺ返しをした。

「チョット待って、チョット待って。こう言う悪者は、私が退治してやるから」

堀内は、お互いにファンを自負する桂枝雀の出し物の中でも秀逸な『一人酒盛り』の一節で、場面は独りやもめの引っ越しに、仲間が手伝いに来て酒を酌み交わす段になり、「俺は素人の酒飲みとは違うぜ」と、上酒に上爛を吹聴する主人公が、飲み加減を試飲しながら、「惜しいな、もうチョットや」と、独り呑み込みするシーンの次に、口に任せて言うセリフの真似事をした。

「大根食べてや。イイダシ吸うてまっせ！」

真紀も、枝雀がそのシーンで言うセリフ、「鱸食べてや」を振って応酬する。

「ナンヤ！その言い草は」

堀内は笑いを押し殺して、強面に出る。

「上等な情婦は、ニョロニョロと、入ってこます」

真紀は自制が効かなくなって、枝雀の「上酒上爛は、酒の方からニョロニョロ入ってくる」のセリフを準えるばかりか、地口までも添えてしまった。